



第5回環境コモンズフォーラム

コモンズ資源

ハスカップの新たな共有と保全を考える

国内唯一のハスカップ群生地といわれている北海道勇払原野で自生するハスカップをコモンズ資源<sup>\*1</sup>と捉え直して、持続できる利用と保全を考えるフォーラムが、環境コモンズ研究会（(一財)北海道開発協会）とNPO苫東環境コモンズの共催で、6月27日に苫小牧市で開催されました。

環境コモンズ研究会の座長である小磯修二北海道大学公共政策大学院特任教授から、これまでの活動の振



り返りと開会挨拶の後、二つの基調提言とハスカップの状況報告が行われました。

基調提言 1

自然資源の共有をめぐる知恵と苦悩

「自然資源の共有をめぐる知恵と苦悩」はシンプルですが、解決が難しい問題です。大まかにいうと、自然はみんなのものか、一部の人のものか（開くか閉じるか）という問題で、この問題を巡って、侃侃諤諤<sup>かんかんかくかく</sup>やってきたのが人間の歴史です。



齋藤 暖生 氏  
東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林助教

コモンズと資源管理

自然はもともと、誰の物でもありませんでした。自然が無限にあれば問題なかったのですが、人口が増えてくることで自然に限界があることが分かってきて、それに警鐘を鳴らした論文として、ギャレット・ハーディン<sup>\*2</sup>の「コモンズの悲劇」があります。

悲劇のシナリオは、個人の牧夫が、誰もが使える放牧地（コモンズ）に自分の利益を増やすために放つ家

<sup>\*1</sup> コモンズ資源（Common pool resources：CPR's）  
不特定多数の人が利用でき（排除性低い）、かつ、利用に応じて利用価値が少なくなっていく（競争性高い）性質を持った天然または人工の資源。「自然の恵み」といえるもののほとんどがこれに該当する。（図-1参照）

<sup>\*2</sup> ギャレット・ハーディン（1915-2003）  
アメリカの生物学者。1968年に「コモンズの悲劇」を発表。

<sup>\*3</sup> 伝統的なコモンズ  
スイスのアルプ（放牧地）、スペインのウエルタ（灌漑用水）、バリのスバック（灌漑用水）、インドネシアのサシ（海岸）、日本の入会など。

畜を増やし、他の牧夫も同様に家畜を増やすことで、最終的には牧草地がもたなくなってしまうというものです。ハーディンはこの中で、共有（コモンズ）だからダメで、“私有”か“公有”にすべきだとしています。私有だと過放牧によるデメリットは自分に返ってきますし、公有にすると政府などが科学的なデータに基づいて規制して管理することで、結果的に持続可能になるということです。

しかし、伝統的なコモンズ<sup>\*3</sup>では利用圧をコントロールされている例があり、北米ではコモンズ論が台頭してきました。コモンズ論で自然資源を財として捉えると図-1のようになります。ハスカップを含む自然資源一般がコモンズ財にあてはまり、排除しにくく競争しやすい性格から、宿命の課題が二つあります。一つがフリーライダー（ただ乗り）問題で、資源管理のために義務を果たさない、ルールやマナーを守らない人たちも資源にアクセスできてしまう（排除しにくい）ために発生します。そのため二つ目として、ならず者を含めて資源を利用する結果、過剰利用問題（共有地の悲劇）が起きやすいのです。

私たちの先祖は共同体の村（コミュニティ）で暮らす中で、このような扱いにくい資源を子孫孫使うための知恵でその悲劇を回避してきました。その知恵には、権利のある人を決めて領域も明確化したり、解禁日や区域を限定する利用上のルールを設定したり、不正な利用者のモニタリングと罰則規定をつくって違反

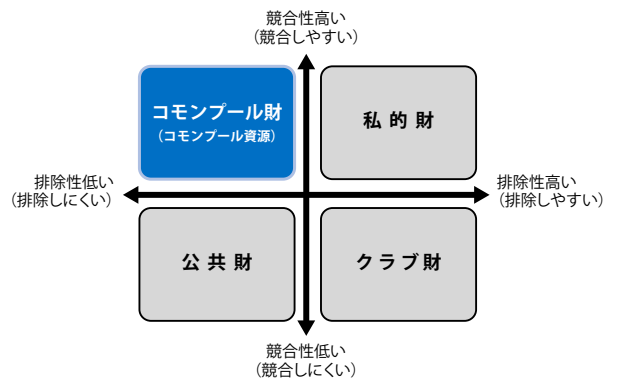


図-1 自然資源の財としての性質

者が出ないようにしたりする仕組みがあります。

ハーディンは、全くの自由のことを“コモンズ”と言っていました。伝統的なコモンズでは、全くの自由ではなく制度があって、その制度も上からの押し付けではなく、利用者が自主的に話し合って築き、変更を重ねてきたものでした。コモンプール財である自然資源は、みんなが使う性質を持っていますが、そこにいかに制度を乗せるかが大事なのです。

#### マツタケの入札制度

自由な制度から排除性を高めた制度にどう変わってきたかを、京都府におけるマツタケの入札制度を例にみてみましょう。かつては、誰もがどこでマツタケを採ってもいい自由採取でした。江戸時代の初めに神社や藩が採取権の入札制度を導入しますが、その範囲が江戸時代の末期から大正時代にかけて徐々に広まり、多くの村（今の集落等）が入札を行うようになりました。つまり、売れる（お金になる）ようになって自由採取から入札制度となって排除性が高まってきたということです。これには、村の収入に占める割合が大きく困り込みの必要に迫られた事情もあります。こうした事情もあり、個人の山でも共有林でも、村が一括して入札対象とした全山入札制度が多く採用されました。

これは商品化を契機に利用のルールを明確化し、利用圧のコントロールを図った例です。ルールが明確化する（排除性が高まる）ときには、いくつかの契機があります。過去の研究でもいろいろな指標があり、例えば、単位面積当たりの生産額が高い資源に関しては、個人で困り込む仕組みが見られますし、逆に生産額が低い資源は共同利用という整理があります。

土地所有の観念も大事で、マツタケの全山入札制度も、昭和50年頃になるとおかしいという声が出てきて、「法的根拠に基づく売買契約で個人の権利を有しながら、個人の権利も自治会は剝奪している」と土地所有権により他者を排除しようとした記録があります。

排除性を高める契機となる社会的な要因をまとめると、利用圧の高まりとして商品化と交通の便が良くなり外からの人が採りに来ることが挙げられます。また、草山<sup>※4</sup>の場合には毎年火入れをしたり、薪を得るため

に萌芽更新をさせるなど、栽培も含む投資をしている場合も考えられます。近代的な土地所有の観念がそうさせる場合もあります。このように、わが国でも自然資源への排除を社会的に高めてきた流れがあります。

次に排除する困難さを経験した事例を紹介します。岩手県西和賀町では大部分が国有地で無主物として、山菜・きのこを自由に採取してきましたが、道路が整備され林道が伸びたことで外部からの利用圧が高まり、それを排除するために30年ほど前から地区単位に入林権を発行する制度にしました。しかし、近年になって入林権販売が低迷して、その収入では監視人の人件費もカバーできない事態となっています。コントロール（排除）にはコストがかかり、排除性を高める制度を維持することは簡単でないことを示しています。

#### オープンアクセスを考える

オープンアクセス（非所有制度）は、北欧の万人権が代表です。スウェーデンでは、土地の所有者に関係なく、誰もが自由に森林・湖沼で散策、採取や釣りを楽しめます。これは中世まで遡ることができる慣習だそうです。1900年代初頭に土地所有の観念で衝突があり、ルールとモラルに関することを明確化したのがスウェーデンの万人権の基のようです。

現在、環境を保護するために「乱すなかれ、壊すなかれ」を徹底しつつ、自然に親しむ人を次世代に育てることを重要視して、万人権は環境省が管轄し教育・普及に取り組んでいます。万人権に関しては自然に親しむ人を次世代に育てることを重要視して、環境省が管轄しています。万人権についての知識は学校で教えるのはもちろん、家族でベリー摘みやキノコ採りに行った中で規範を学んでいて、土地所有者に迷惑をかけない行動が身につく仕組みが社会にできているからこそ、受け入れられていることが現地の調査で分かりました。

自然資源をめぐる制度は、開放するか排除するかの軸の上に整理できます（図-2）。極めて開放的なもの

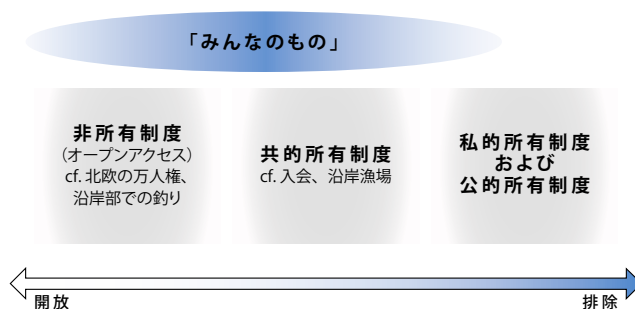


図-2 資源管理の2つのベクトル

※4 <sup>くさやま</sup>草山  
 栗や萱などの採取を目的とする場所。

が万人権で、極めて排除的な制度が私的所有制度・公的所有制度です。その真ん中に共的所有制度として伝統的なコモンズがあります。通常「みんなのもの」というと主に非所有制度と共的所有制度の部分を示しますが、排除の度合いが時代や対象とする資源によって違うので、この間を常に揺れ動いています。排除と開放にはそれぞれ利点と難点があり、開放した場合には過剰利用の難点を抱えますが、管理コストがかからず、自然とのつながりで次世代を育めますし、生態系サービスの恩恵を受けられる利点があります。

最後に、自生するハスカップは生育地へのアクセスは排除しにくく、資源密度が高く、収穫の予測可能性も高いので、利用のコントロールはしやすい資源だと思います。採取効率も悪く、採取対象は果実のみで、資源劣化しにくい性質のものです。採取活動にはリスクがあって、平坦なので道に迷うあるいは遭難することがあることと、藪こぎでダニにかまれたり蛾や蚊に刺されるなどの害虫被害もあるので、参入障壁は意外と高い資源なのではないかと思いました。

## 基調提言 2

### ハスカップを過去から未来に「つなぐ」ために

ハスカップがどういうもので、私たちがハスカップについて何をしようとしているのかについて、お話しします。



小玉 愛子 氏  
苫小牧市美術博物館  
主任学芸員

#### ハスカップについて

ハスカップの正式名称は「ケヨノミ」、冬に葉を落とすスイカズラ科スイカズラ属の落葉小低木です。葉の形は長いだ円形だったり卵型で、北海道の湿原でハンノキが生えるような低層湿原に分布します。標高の高い所やアジア北東部、本州でも一部確認されています。語源はアイヌ語で、正しくは「ハッ・カッ」枝の上にたくさんなるものという意味です。

北海道では勇払や釧路、日高山脈の日高側に分布し、湿地のある海沿いや標高の高い所に生育しており、道央や日本海側には出現していません。5～6月にかけて

クリーム色の花を咲かせて、6～7月に結実し、実が濃い紫色になったら食べ頃です。7月中旬が旬で苫小牧では樽前山神社のお祭りの頃が食べ頃といわれていますが、ここ数年は少し早まっているようです。

#### ハスカップと人のかかわり

苫小牧でハスカップを利用した記録があったり、象徴的なものとなっているのは、苫小牧（勇払原野）にハスカップが生育する環境が広がっていたことにつながります。当苫小牧市美術博物館で募集している「ハスカップの思い出」<sup>※5</sup>にも徐々に情報が集まっていますし、過去のハスカップについての取り組みや記録が残っています。一例では、昭和の初めに沼ノ端駅で売られていたハスカップ羊羹や餡は、沼ノ端に住んでいた方々が地域を活性化しようと尽力されたものだそうです。また、昭和54年に豆本「ハスカップ物語」が発行され、昭和61年に「苫小牧市の木の花」として市史にも載っています。現在では、苫小牧市のゆるキャラ「とまチョップ」が首からぶら下げていたり、小学校の副読本に取り上げられているなど、苫小牧のシンボルとなっています。しかし、実際の実原野に行ってハスカップを見たことのある子どもたちはどのくらいいるのでしょうか。家族と一緒に摘みに行く以外、ほとんどいないと思います。ですから、ハスカップが原野の茂みに生育していることがイメージできる場をつくる必要があると感じています。

#### ハスカップを未来につなぐ

ハスカップは、勇払原野では「当たり前」の存在でした。ハスカップの栽培や商品化が進んではいますが、自生種の生育環境は変化していて、当館としては未来を展望するために、苫小牧（勇払原野）の歴史・自然史をハスカップというフィルターを通してもう一度振り返り、後世の人たちに伝えたいと考えています。

これからは、NPO法人苫東環境コモンズと協力して、過去の自生地や利用方法の聞き取り調査と生育地の確認のほか、ハスカップが好む環境があるのかを含めた環境特性について調査したいと考えています。

当館では、来年ハスカップの企画展を行うにあたり、ハスカップに関する資料や情報の収集や編纂<sup>へんさん</sup>を行って

※5 2016（平成28）年2月13日～3月13日に企画展「ハスカップ～原野のめぐみと描かれた風景」を開催します。企画展に先立ち、美術博物館では皆様からハスカップに関係する「ハスカップの思い出」を募集しています。詳細は、苫小牧市美術博物館のホームページをご覧ください。  
<http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutsukan/tenrankai/hasugenyu2016.html>



います。この展示だけではなく、今後も勇払原野の動植物について展示や教育普及事業など、いろいろな活動をしていきたいと思っています。ハスカップを縦軸に、勇払原野とそこに生きた人々、生きている人たちの「過去」と「現在」、そして「未来」をつなぐことができないかと考えています。

## 報告

### ハスカップ・サンクチュアリの現況

私たちのNPOでは、日本あるいは北海道でハスカップの一大群生地といわれている苫東の勇払原野の一面を「ハスカップ・サンクチュアリ」と勝手に名付けて調査しています。今日はそこで分かったハスカップの現状について報告します。

私たちは、衛星から送られてくる電波で地球上の位置が分かるGPSと呼ばれる測定器具を用いて、木の種類を限定してその場所を確定する調査をしています。調査の場所は、苫小牧港の西港から東港<sup>あびらがわ</sup>に向かう道道沿いで、いすゞ自動車を過ぎた安平川の右岸にあたります。ハスカップとハンノキ、そしてベニバナヒョウタンボクが、それぞれ生きているのか枯れているのかと、ナラ類の有無を調査してプロット(図-3)し、可視化してみせるのがねらいです。

調査からは次のことが分かりました。

- ① 2,500~3,000本/ヘクタールに近いハスカップが生育している部分がある。
- ② ベニバナヒョウタンボクが枯れ始め、ハンノキも一部枯れている。



**草苺 健**  
NPO法人苫東環境コモンズ  
事務局長

- ③ 枯れているハスカップもあるが、30cmぐらいの幼木も見つかっていて更新されているものもある。

現場では、ミズナラが生えている所にハスカップはほとんど出ていません。また、ハンノキが多い所にはサクラなどの他の木も生えていて、ハスカップが覆われつつあります。ハスカップは、年輪から50年ぐらいの寿命で置き換わってきたことが考えられますが、前回の更新の時には今のようにハンノキは大きくなかったと考えられます。

ハスカップ・サンクチュアリー帯は、安平川の遊水地として開発をしない場所になったので、自然を保全する点では良い結果となっています。しかし、まだ持続可能な状態で維持する方法については答えがありません。そのために現状を知り、手だてを考える一つの手助けとして、私たちの調査が活かされればと思います。また、その際にハスカップを地域が共有する財産(コモンプール資源)として捉えることも大切だと考えています。

道道が整備されてアクセスし易くなり、多くの人たちが摘みに来るようになってきています。ハスカップの恵みを共有するのか、あるいはどう守るのかを考えなければならず、私たちが苫小牧市美術博物館とハスカップを中心に置いた連携事業を始めたことが、苫小牧市民、あるいはハスカップに関心を持つ人たちの拠り所になるような情報交換の場(プラットフォーム)の一助になればと思います。

これまでに行われた環境コモンズのフォーラム内容は、(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所のホームページ内「持続可能な地域社会形成の具体的な展開に関する研究」で、ご覧いただくことができます。

<http://www.hkk.or.jp/kenkyusho/chosa.html>

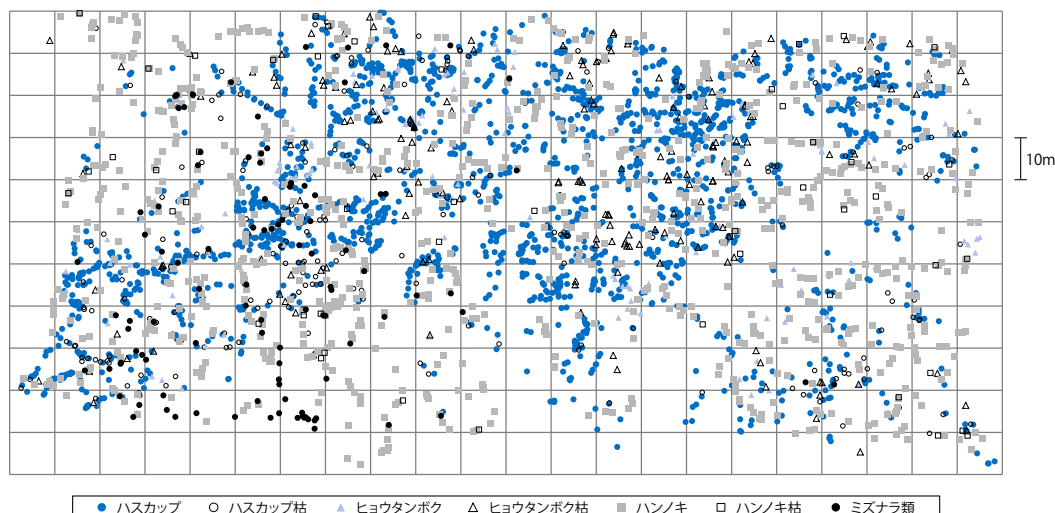


図-3 調査地(2ha)における群生のようす